



平山幹生(著)

『見逃し症例から学ぶ 神経症状の“診”極めかた』

[評者] 諏訪中央病院総合内科/院長補佐 山中克郎

著者の平山幹生先生を私はよく知っている。名古屋近郊にある春日井市民病院という人気の研修病院で、3年間ほど研修医教育と一緒にさせていただいた。実直かつ臨床能力の高い臨床医である平山先生は、当時、副院長(研修医教育担当)をされていた。神経内科だけでなく、すべての医学領域において貪欲な探究心をお持ちである。ケースカンファレンスの後で、「参考になる論文はこれです」と何度も重要論文をお送りいただいた。私はそのように真理を探究する平山先生の姿勢に大変敬服している。

平山先生が40年間の臨床経験に基づいて書かれたのがこの書である。示唆に富む教育症例は全部で61あり、「意識障害」「頭痛」「めまい」「発熱」「嘔気・嘔吐、不定愁訴」「しびれ、痛み」「けいれん、高次脳機能障害」「脱力」「錐体外路症状」「脳神経症状」の10章に分類されている。症例ごとに誤診(診断エラー)の原因と対策が分析されている。どうして診断を間違えたのかを、認知エラーとシステム関連エラーに分け、さらに細かいカテゴリーから考察されている。

私にも経験がある。自分が判断を誤った、または考察が少し足りなかったというケースを書くのは非常に心が重い。できれば思い出したくない。不幸な転帰を辿った場合にはなおさらである。しかし、人は失敗から多くのことを学ぶ。医師もまた然りである。事実に基づいて症例を深く振り返り、どこで思慮が不足していたのかを分析することは重要である。また同じような患者が現れるかもしれない。本書で学んだ医師が、同じピットフォールに陥ること

を防いでくれる。

「神経内科診療の達人」になるための12か条が書かれている(p.vii)。「患者から学ぶ姿勢を貫く」「疾患の診断のポイントを覚えておく」「問診で鑑別すべき診断を頭に浮かべ、要領良く所見をとっていく」……書かれていることの多くは、すべての内科医が心掛けるべき重要事項だ。

「辺縁系脳炎症状を呈し、完全房室ブロックをきたした患者」(p.15)の診断過程が非常に興味深い。MEDLINEで“encephalitis, myocarditis”のキーワードを入力し、類似症例を検索する。その後に確定診断のため、冷凍保存されていた9年前のペア血清を用いて外注検査を依頼したそうだと。診断に対する、凄まじい情熱に脱帽である。

最終診断後の文献的考察を交えた疾患に関する詳細な解説が非常に勉強になる。NMO spectrum disorderは最新の診断基準が紹介されている(p.158)。小脳・脳幹の血管支配についてのシェーマは秀逸でわかりやすい。「首下がり患者で鑑別すべき疾患」(p.230)など、キーワードから連想される疾患についての整理は、日常臨床で非常に役立つだろう。

これから神経内科医をめざす若手医師はもちろんのこと、神経疾患の診断が得意になりたいプライマリ・ケア医にも強く購読を勧めたい素敵な医学書なのである。

● A5 / 頁 284 / 2015 年 / 定価：本体 4,200 円 + 税
[ISBN978-4-260-02415-0] 医学書院刊